

今年も開催！ 京都でついた餅を宮城に届けよう

京都生協「復興支援餅つき大会」開催

11月25日、京都生協は「復興支援餅つき大会」と称して京都で餅つきを行ない、その餅を12月1日に宮城県南三陸町と登米市で振る舞いました。

この企画は、2011年の同じ時期にも行なわれており^{※1}、今年は、同じく南三陸町で支援を行なう大阪いずみ市民生協も参加しました。

●まずは、京都で餅つきを

11月25日、京都生協の職員ボランティアが中心となって企画した「復興支援餅つき大会」が京都生協本部（京都市南区）で実施されました。

餅米は、京都生協の取引先である鳥取県畜産農業協同組合（以下、鳥畜）が安価で提供。なおこの餅米は鳥取で暮らす幼稚園児と小学生に、田植えや稲刈りの経験をしてもらう催しを兼ねて育てたものです。

お昼前には、東北から避難し、京都市山科区や宇治市の公営住宅などで暮らす方々も参加し、できあがった丸餅は約8,000個になりました。

●京都からの餅が宮城へ到着

1週間後、京都生協の職員ボランティア26人と、鳥畜、大阪いずみ市民生協、みやぎ生協のボランティア等総勢70人が、餅と約1頭分となる200kgの鳥取牛などを持って、志津



振る舞いは、行列ができるほどの人気っぷり。



餅つきは、京都だけでなく、登米市でも行なわれた。餅つきの掛け声に、仮設住宅にぎわう。

川漁港（宮城県南三陸町）と登米市南方仮設住宅を訪問しました。

宮城県漁協志津川支所からは、この秋に震災後初めてとれたカキを使ったカキ汁が振る舞われました。支所のかき部会長の遠藤勝彦さんによれば、現在は資材不足もあり「かつての3分の1強の規模」でカキ漁を再開しているとのこと。

会場には、8月に京都生協が主催した「海の虹プロジェクト」^{※2}に参加した中学生も来ており、職員との再会を喜んでいました。

お餅と鳥取牛のサイコロステーキ、大阪いずみ市民生協が提供したおにぎりや漬け物を味わった南三陸町と登米市の方々からは、「おいしい！」との声があがっていました。

●今後は事業としての支援を

京都生協職員ボランティア活動のリーダーを務める福永晋介さんは、現地での支援内容について「がれきを片付けたり、養殖再開に向けた作業のニーズは、前に比べると小さくなってきました。今後は生協の事業

としての支援をぜひ実現させたい。2カ月に1度は南三陸町に行き、現地の方とお話をしてきましたが、仕事があるということは何よりも人の表情を明るくする、と思うようになりました」と話します。

また、「復興の担い手となっていく子どもたちを支えるという視点が必要です。まずは応援している人がいること、自分たちが1人でないことを感じてほしく、8月に『海の虹プロジェクト』を企画しました。京都の名所だけを回るのではなく、過疎が進む地域を訪れ、人口が減っていく厳しい環境の中でも希望を持って、ふるさとづくりをしている人々とふれあう時間もつくりました。多くの方が協力してくださりうれしかったです」

福永さんの言葉には、日々変化するニーズに対応しながら、被災地の10年先、20年先を見据えた支援を今後も継続してやっていくという決意がにじみ出ていました。

※1 関連記事：本誌9号掲載。

※2 南三陸町の子どもたちを京都に呼び、沢登りなど自然とふれあえる体験や、過疎が進む地域の人々との交流などを実施した。（関連記事：本誌21号掲載）